

新版 ヘンデル風土記



1989年1月/2006年11月

野口幹夫

目次

| | | |
|-----|-----------------------|----|
| (1) | ヨーロッパの民族史の片隅…………… | 2 |
| (2) | 大旅行家ヘンデル…………… | 3 |
| (3) | ヘンデルのお酒落…………… | 4 |
| (4) | ギルド職人と音楽事業家…………… | 5 |
| (5) | メサイアとジョナサン・スウィフト…………… | 7 |
| (6) | メサイアと孤児院…………… | 10 |
| (7) | ヘンデル賛歌…………… | 13 |
| (8) | ヘンデルからモーツァルトへ…………… | 15 |

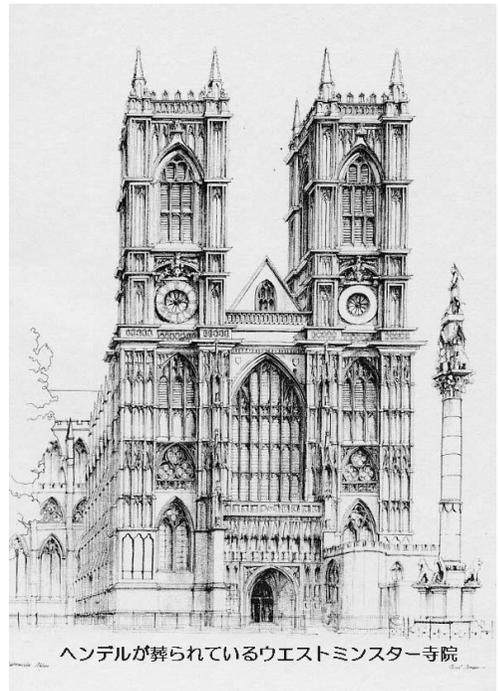
(この小文は湘南フィルハーモニー合唱団で、1987年9月より約2年をかけてメサイアに取り組んでいる間、合唱団の機関紙『フィル唱通信』に連載したものが元になっています。

それから約20年後の2006年12月に今度は小規模な混声合唱団アネモスでメサイアを公演するにあたって、追加改定して新版としたものです。年あたかもモーツァルト生誕250年でした。第8章はその年を記念して追加しました。)

(1) ヨーロッパの民族史の片隅

荒波をうけてそそりたつ断崖 いつも強い風のなかにある寒村、映画『ライアの娘』はそんなアイルランドの僻地が舞台です。第一次大戦当時のアイルランドは独立前の不穏の中で村には英国軍の小隊が駐屯し 村民は彼等に強い反感を持っています。人は仕事もなく退廃的ですが 独立運動の反乱ゲリラを密かに応援しています。たった一軒の酒場のおやじライア その美しい娘ロージィ。彼女と小学校に住込みの先生 それに対独前線を負傷しこの寒村に回されてきた英軍将校などをめぐってドラマが展開します。ダブリンの教師会議から帰ってきた先生はロージィにダブリンでの音楽会の話をしてします。『ベートーベン禁止されているのさ、馬鹿な話だ。』第一次大戦でドイツと戦う英国 密やかにそのドイツと組んででも独立したいアイルランド きびしい歴史の錯綜したヨーロッパの民族関係が音楽にも影響を与えずにはいません。

ヘンデルの傑作オラトリオ『メサイア』はこのアイルランドの首都ダブリンで初演されています。ヘンデルはロンドンを拠点として活躍したのですが、この大曲がロンドンでなくダブリンで初演されたのはなにか特別な事情があったのでしょうか。そんなことからその頃のダブリンとロンドンの関係やヘンデルの人となりを見てみたいと思います。アイルランド総督ウィリアム・カヴェンディッシュの依頼でメサイアの作曲にとりかかったのは1741年のことです。その五年前の1736年にはロンドンで大規模な暴動が起きています。反アイルランド暴動です。アイルランド移民が安い賃金で働くので仕事を奪われたとって ロンドン労働者群衆 4000人がアイルランド人の溜り場や居住地をおそったのです。アイルランドは16世紀から徐々に英国の植民地化が進められてきました。土地を奪われ産業は押えられてその宗教であるカトリックは差別されました。英国国教はプロテスタントです。窮乏したアイルランド人民衆は仕事を求めてロンドンに集まってきました。安い賃金で働くのもなりゆきです。そこでこの貧しいものどうしの闘いです。(救いのない出来事ですが、日本でも戦前韓国民との間で似たよ

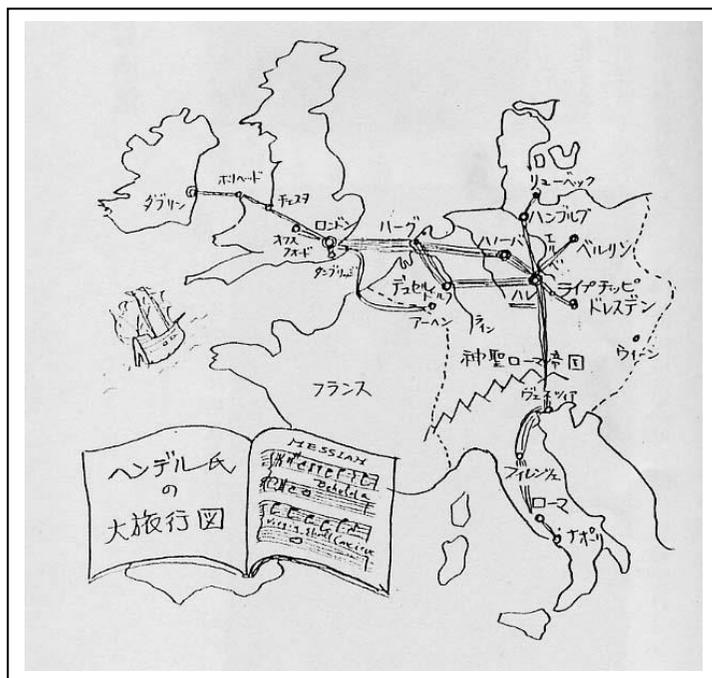


ヘンデルが葬られているウエストミンスター寺院

うなことがありました。) この緊張関係はヘンデルがアイルランドを訪ねた1741年も続いています。

ヘンデルはこのあふれる群衆を飲込むエネルギーを持ったロンドンにひかれたのに違いないと思います。ハノーバーもヨーロッパの数少ない自由都市でしたが ロンドンはハノーバやその他の都市にない新興のヴァイタリティを持っていました。ヘンデルの音楽はひとを楽しくさせるのが本質です。信仰の表現であったり 王侯貴族の慰みものではなく人々のためのエンターティメントの音楽こそ彼のものでした。そんな彼の音楽にはロンドンほどふさわしい都市はなかったと思われます。これから一八世紀のロンドンとヘンデルの仕事振りを詳しく見ていきたいと思います。(1988年1月3日)

(2) 大旅行家ヘンデル

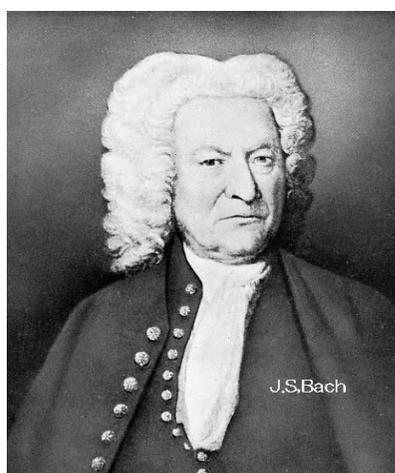


ヘンデルが活躍した一八世紀のヨーロッパの各都市と彼の旅行ルートを図にしてみました。いまヨーロッパの都市間はどこでも飛行機で大体一時間でいけますが、当時の交通機関は馬車と帆船です。メーリケの『旅の日のモーツァルト』から推定しますと三頭立ての馬車で一日50 Km位です。ロンドンからメサイアの完成楽譜をもってダブリンにいった時はこの旅行に約半月かかっています。アイリッシュ海を渡

るのに順風をまってチェスタに数日滞在せねばならなかったのです。それでも船が出ないのでさらにホリヘッドまで足をのぼしここからダブリンに渡ったと言われています。ヨーロッパのその頃はイギリスとオーストリアの八年にわたる王位継承戦争やフランス プロイセンなど領土拡大の小競合い戦争がしょっちゅうありました。たいていは局地戦ののんびりしたものですが、それでもそこは避けて行かねば

ならなかったでしょう。ヘンデルは晩年最後のドイツ旅行中オランダのハーグの近くで馬車が転覆し重傷をうけながら辛うじて死をまぬがれるという事件に遭っています。それにしてもヘンデルはよく旅行しました。生れ故郷のハレからロンドンまで800Km ローマまで1200Kmあります。生涯大きな旅行を18回 延べ旅行距離にして約二万キロになります。それはさておいても、なぜヘンデルは生れ故郷のドイツを去ってイギリスを仕事の場としたのでしょうか。それが気になっていろいろ調べてみるとなるほどのことどもがわかってきました。次回からそれを順次ご紹介しましょう。（1988年1月31日）

(3) ヘンデルのお洒落



ヘンデルは少なくとも六枚の肖像画を残しています。その中から代表的なものを同い年のバッハの肖像画と並べて見ましょう。バッハは小学校の校長さんといった地味な服装で渋い顔つきに描かれて

いるのに、ヘンデルは豪華なビロードのガウンに絹のストッキングそれに飾り剣をつけた貴族風の堂々たる風采です。この机に置かれている本はメサイアの楽譜です。これに限らず彼の若いころの絵も帽子や凝った上着で描かれています。ヘンデルは大変おしゃれだったようです。15～16世紀の服装感覚には今ないものがありました。それは服飾が身分の証であったことです。平民が貴族の服装の真似をすると処罰されたのです。英国では様々な贅沢禁止法が、これらの世紀に作られました。モーツァルトの『ドンジョバンニ』や『フィガロの結婚』には、服装を取替えることで相手にな

りすまず場面が出てきます。服だけで相手をだます筋だてをたわいなく感じて見ていましたが、この時代の服装モラルと夜の闇の深さでそれなりの現実味があったのです。流行は専ら上流貴族階級がつくり、それも男のお洒落が中心でした。庶民は貴族の一時時代前の流行スタイルを、それも安い着地で作る事が許されていたのです。その理由は身分差をはっきりさせたい貴族の要求と、一方ジェントルマン商工階級からみてもオランダからの輸入毛織物の抑制をはかり、国内織物業の育成を計ろうという考えとが一致して、この贅沢禁止法が二世紀にわたって維持されたのです。イギリスは王様も必要な職業として置いているというようなところがあって、万事上を上とも思わない社会です。庶民が貴族の流行をすぐ追掛けてきます。輸入制限で英国産の毛織物もようやく力がついてきます。こうなると逆に国内需要が増えたほうがいい、贅沢も結構というわけで、とうとう贅沢禁止法は1604年に全廃されてしまいます。その後の百年は庶民の服装贅沢がイギリスの産業革命をうみだしていく土壌となったのです。ヘンデルがロンドンにきたのは、まさにそのころ1710年の事でした。庶民の服飾自由化の最先端は、ひとりここロンドンでした。フランスはルイ14世の絶対王政下、フランス革命まではまだ百年。ドイツはもっと遅れてまだ神聖ローマ帝国の冠のもと選定侯達が狭い封建領土を分割支配していました。

(4) ギルド職人と音楽事業家 その一

ヘンデルとバッハ、この同い年の二人を比べていくとヘンデルのことがよくわかってきます。バッハが親族にも沢山教会音楽家がいる、いわばギルド職人仲間として自然と音楽家となったのとは事情が違い、ヘンデルの父はザクセン選定侯アウグスト公爵付き外科医師でした。父は幼児のヘンデルが音楽に親しむことに強く反対したといわれています。外科医師からみれば、宮廷音楽士の地位は低かったからでしょう、ヘンデルは父に隠れて音楽に親しみますが、その才能がひょんなことから公爵に知られたことでその口添えがあっただけで音楽の先生に付くことが許されたといえます。しかし高級職業人として成功した父の影響があったのでしょうか。父がなくなったあと16才のときハレ大学に入り法学士になろうとします。しかし実際には音楽を学んでいたことはいうまでもありません。

バッハが終世ドイツの宮廷と教会で地道な宗教音楽を作っていたのに対し、ヘンデルはヨーロッパ2万Kmを旅行し、その服飾の趣味と同じく華やかで大衆受けをねらった音楽をつくっていったのは、かれがつねに音楽を事業としてとらまえていたか

らのように思えます。それは音楽を職業としても、父が好まなかった地味で報いのすくないドイツ宮廷音楽家の道ではなく、オペラのような華やかな事業成功者でありたいと考えていたからでしょう。彼の父ゲオルグは世襲ではなく始めた外科医であり、薬の販売を手掛け床屋を営みさらに酒の販売のライセンスを選定候に手を回してとるといった具合のやり手でしたから、事業の感覚は親譲りであったわけです。

(4) ギルド職人と音楽事業家 その二

ドイツの職人はギルトの世界で育っていき、ギルドによって職業的地位を得ていきます。バッハは音楽家系のなかで教会音楽に安住の地位を生れながらに得ることが出来ました。ヘンデルがもしそれを望んだとしてもギルドとは無縁でしたから、きびしい状況であったことも想像できます。このようにみていくとヘンデルが何故ドイツを捨てて、ロンドンに本拠を構えたかは、偶然ではなく事業家ヘンデルの戦略的発想からきていることがわかります。ロンドンは当時もっとも自由で成長中の享楽都市でありドイツ音楽家ヘンデルはそこにしかマーケットを見出せなかった筈です。(パリは市場としては大きくても田舎者ドイツ人には敷居が高い町です。)

音楽で事業として成功させようとするヘンデルとしては、いつも親しみやすくて何か人をあっといわせるドラマティックな作品をつぎからつぎへと用意せねばなりません。自分自身の姿も売込まねばなりません。かれの才能はその両方を成功させていきます。

かれの音楽が当時の民衆に受けかつ250年後のいまなお大衆受けのするものであることはいささか驚くべきものがあります。たとえば甲子園夏の高校野球の優勝旗返還の行進曲がかれのオペラ“マカベウスのユダ”の中の“勇士は帰りぬ”であったり去年NHKの紅白歌合戦にはじめて登場したクラシックの歌が、これまたTVのCMとしても異色であったヘンデルの曲 オンブラ・マイ・フであったことなどでもわかります。

個人の才能と魅力だけで事業を成功させ維持していくのは大変なことです。ヘンデルはついに生涯伴侶をもちませんでした。そのいきざまの厳しさを物語っているように思えてならないのです。

バッハはそんなきわどい生き方はしませんでした。教会に生き安心して神に自分の音楽の才能を捧げればよかったのです。いうなればバッハは神のためそしてヘンデルは人のために音楽をつくったとでもいえるのでしょうか。大曲“メサイア”の魅力もここにあります。

(5) メサイアとジョナサン・スウィフト

ヘンデル風土記の中心はやはりメサイアをめぐる話でなければなりません。この話題を表題にした本があります。ワトキン ショウの『ヘンデルのメサイア物語 1741/1784』です。ショウは現代のヘンデル研究家で湘南フィルがうたっている楽譜もショウ版によって修正してついています。ところでこの本は銀座ヤマハにはありませんが翻訳はありません。ついであらいいますとヘンデルの研究書は日本ではたいへん少ないのです。音楽書の棚にはモーツァルトが50冊次いでベートーベンが30バツハ20最近マーラーがふえて5 そのほかはワーグナ ハイドン サティまでであってもヘンデルはほとんどありません。音楽の友社の大作曲家シリーズの渡部恵一郎氏の『ヘンデル』と フェイバ・アンド・フェイバ社の大作曲家シリーズ(図版が主)の翻訳物を全音出版がだしている『ヘンデル』 やや専門的な書ではE・シュミートの『ヘンデル メサイア解釈と演奏』の翻訳書くらいが目下日本の専門書店で買える邦文書のすべてです。ロマン・ロランの大作のヘンデル研究は注文しなければ入手できない書物になっているのは寂しいことです。ところがアメリカの書店ではこんなに偏ってはいません。やはりベートーベンやモーツァルトはやや多いですが、日本程ではなくて逆にヘンデルもちゃんと数冊あるのです。日本は音楽の世界も集中豪雨形なのかと考えさせられます。

ところでショウのメサイア物語は初演からの演奏の歴史とそのたびごとの楽譜の異動を克明に追いかけたものです。この研究があつてこそショウ版楽譜の権威が高いことがわかりますが 私の知りたかった音楽風土記的疑問の答えはありませんでした。

その疑問とは何故メサイアはアイルランドのダブリン公演のために作られたのかということであり、またロンドンでは何故棄児院の慈善公演にほとんどもっぱら使われるという特殊な事情になったのかということです。この疑問に答えるには18世紀のイギリスそしてアイルランドの生活に戻ってみななければなりません。

さてアイルランドのこと、このヘンデル風土記の冒頭で『ランアンの娘』という映画でちょっとふれましたが、これはヨーロッパの民族と宗教の闘争が、これより先は大西洋という“さいはての地”で、吹きだまりのように荒れ果てた悲劇の土地です。ブリテン諸島の先住民族ケルト人はまずシーザーのローマ帝国に支配され、5世紀には大挙民族移動してきたアングロサクソン人に徹底的にふみにじられ、その一部は同じケルト族の住むアイルランドに逃げていきました。その後しばらくのアイルランドは、聖パトリックによってケルト人のゲール文化を巧みに融合したキリスト教化の成

果が実って、6～7世紀には『聖者と学者の島』といわれヨーロッパ大陸までその影響を与えるようになっていました。しかしその安定は短く北からはヴァイキングの侵入にあつて僧院も荒らされるようになって疲弊します。ついに12世紀にはイギリス王ヘンリ二世の支配下で植民地になってしまいます。聖パトリック以来の強いカトリック信仰に対しイギリス国教からの迫害と差別が加わります。ヘンデルがイギリス市民権をとった1727年頃はイギリス貴族や富裕なジェントリ層による土地の囲い込みと取上げ、産業の独占、就職差別などでアイルランド人の貧困はすさまじい姿になっています。

その頃アイルランド出身の作家でガリバー旅行記で有名となったジョナサン・スウィフトが、狂気のブラック風刺『貧乏人の子供達を親と国の負担とせず公共の福祉に役立てる方法』を発表しています。ガリバー旅行記でイギリス宮廷やさらには人間社会そのものへの痛烈な風刺を展開したスウィフトですが、このときはアイルランドの聖パトリック教会の首席司祭として“みじめなアイルランド たまらないダブリン”側にたつて強力な文書活動をしました。この『貧乏人の子供達……』は不幸な子供達とその親の窮状を救うのに、いっそのこと幼児の肉を食肉にして売出せ、その料理法は云々といったものです。アイルランドの窮状を訴えるにこの上ない痛撃でした。この頃、アイルランドからの窮民がロンドンにどっと流れて安い労働力になったものですから、それに反感をもった地元下層民が暴動を起したことは第一節で紹介したとおりです。

一方のイギリス支配層にとってみれば、アイルランドは新興経済発展力の供給地、活動の自由を約束してくれる地ということであったのです。スウィフトの例をみえますと、若い頃、地位と利権の野心と陰謀をめぐるしたのはロンドン、そしてそれに夢がやぶれ、政争と喧騒の都に疲れはてときの退避場所がダブリンであったのです。

ロンドンの政争というものはいまの我々には想像もつかぬほど市民生活の隅々まで浸透したものでありました。他のヨーロッパ諸国に比べてイギリスの権力構造は歴史的に特異で、王よりも封建貴族とジェントルマンと称せられた商工富裕層の力が強く、王は利権の承認機関のようなもので絶えず陰謀の渦中にあつたのです。きかない王は徒党を組んで追出せばよかつたのです。そのための有力貴族とジェントルマンの徒党が沢山できました。それらはクラブをつくり男たちはクラブハウスにいりびたつて対立する党派攻撃の戦術をねったり文書合戦をしたりしていました。その集約した姿がトリー党とホイッグ党です。スウィフトもロンドン時代はこの渦に身を投じて栄達をはかりましたし、わがヘンデルも好むとこのまざるにかかわらず党派争いに巻込まれます。

ヘンデルは当時のロンドンでの第一級の文化人ですから、どのクラブもあらそって彼をむかえたでしょう。スウィフトは若いころホイッグで活躍しましたが、ここでの求職に失敗して王党トリーに加わっていました。ヘンデルは元来王党派であったのです。なぜならば彼がイギリスに帰化したころ、アン女王からイギリス国王を引き継いだのが、ヘンデルの雇い主であったハノーバー選帝侯のジョージ1世だったのです。そのような事情でスウィフトとヘンデルは同じ王党派として付き合いがあったと思います。

この徒党活動は政治にかぎらず、何事かを社会的に成そうとするときに、プロジェクトとかエンタプライズの名で資本と人の組合せを作り、王の特許を得て事をすすめるのが当時の風潮でした。有力王族貴族をパトロンにすれば何でもできるといった社会全体が起業精神に満ちあふれた時代で、まさに世界を変えた産業革命の胚帯期であったのです。

ヘンデル自身もこれまでみてきたように自分の音楽が事業的にも成功することを求めています。ロンドンでの音楽活動が8年を経た1719年エンタープライズであるロイヤル音楽アカデミの設立に中心人物として参画します。アカデミというと地味な学界のように聞こえますが実はイタリアオペラの興行株式会社です。ヘンデルはこれを活動の場として沢山のオペラを作曲しますが、興行成績を高めるうえで重要なことはイタリアから人気歌手を連れてくることであり、奇抜な舞台演出をすることでした。それに驚くべきことにはこのオペラの世界に党派の争いが持込まれてくるのです。

まず作曲家をかつぐの争いがおきます。アカデミーがよんだ本場イタリアのオペラ作曲家ボノンチーニ対ヘンデルです。ヘンデルがハノーバー選定候兼イギリス王ジョージI世の縁もあって当然王党派とみられていたことから、この反対派ホイッグ党の連中は意図してボノンチーニを担ぎその作品を優先させようと画策したのです。この争いはほぼ3年続いて一時はボノンチーニのイタリア風の優雅でセンチメンタルな旋律の方が旗色はよかったこともあるのですが、結局ヘンデルの実力勝ちで終わります。歌手の場合はもっと派手でむくつけき争いになりました。対抗する二人のイタリアソプラノ歌手にそれぞれの支援党派がついたのです。オペラ劇場が野球場になったようなもので、互いに相手の歌手をやじりたおすために劇場を占拠し、ヘンデルのオペラはその喧騒にかきけされ、最後はジョージI世の王女が臨席している舞台の上でこの二人がつかみ合いの喧嘩をやってしまう騒ぎになってしまいました。これでは真面目な音楽愛好家はロンドンのオペラに愛想をつかせるのが成行きです。こんなひどいバックグラウンドの上にさらにヘンデルのオペラが興行的になりゆかなくなる決定打は、意外なことに意図せざるスウィフトの画策でした。それは『乞食オペラ』の登場だったのです。スウィフト9度目のロンドン滞在時代になりますが、彼一流のやり

かたで自分は表面には名をださずに、友人をそそのかしてやらせるのです。やったことはヘンデルのオペラの徹底的パロディで、荘重な歴史物語の音楽をあれこれ借りて町の乞食たちの恋物語を場面とし、当時の貴族・権力者を痛烈に風刺したものでした。これはロンドンの一世をふうびしました。そしてロイヤル音楽アカデミは観客をうばわれその年に倒産します。ヘンデル43才の年でした。ヘンデルはしかしこの『乞食オペラ』の作者達にはうらみを持ったりしなかったようで、その後もシナリオを頼んだり付合っています。かれは真面目な顔をしていうジョークで人を笑わせる人だったので『乞食オペラ』のユーモアは自分を打っても許せたのでしょう。このアカデミ倒産は長い目でみれば10年後に『メサイア』をうみだすための大きな転機であったのです。これから約10年ヘンデルはオペラ復権の苦しい努力をしますがもはや過去の成功はなく、この間母をなくし自身も脳卒中で倒れるといった人生で一番苦しい時期を過ごします。そしてこの間に徐々に向かったのが宗教的オラトリオだったのです。ここには人をおどす舞台装置もいらず、合唱が主役で人気とりのための歌手もいない。純粹に音楽のよさを追及できる世界であったのです。そしてその頂点である『聖なるオラトリオ』こそ、喧騒のロンドンでなく、アイルランドの首都ダブリンがその初演にふさわしい場所だったのです。そこは辛味の友人スウィフトが傷心をいやすために戻り、そして最後はその身のためでなく逆にその身を捧げて戦ったかつての『学者と聖者の島』の都だったのです。

メサイアは1742年4月12日ダブリン、フィッシュンブル街のミュージックホールで初演されました。この年の夏ジョナサン・スウィフトはダブリンにいて老人性痴呆症の廢人として自分でつくった精神病院に収容されています。この初演にはスウィフトが首席司祭であった聖パトリック教会の合唱隊が参加しているのです。舞台袖に車椅子の老スウィフトがあつてうっすらと正気の涙を流していたという幻想を抱きたいのです。

(1988年8月7日)

(6) メサイアと孤児院

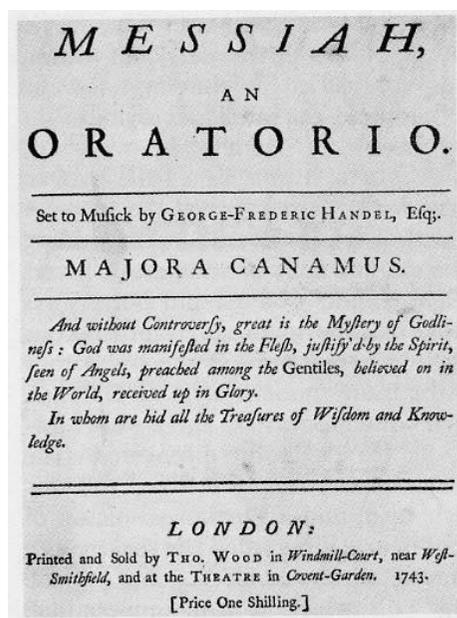
さて話は老人から一転して生れて間もない幼児とメサイアの物語です。18世紀のロンドンはその世界でもっとも活況があり、かつ自由の都でした。世界中から仕事を求めてあるいは宗教上の迫害を逃れた人々が流れこみ18世紀の始めに60万人だったのが、その世紀の終わりには約90万人にふくれあがっていきます。都市の不衛生、貧困も急速にすすみます。悲惨なのは育てられない子供の増加でこの1730年から1749年の統計では5才以下の幼児は年平均約75%が死亡という信じられない

いような数字がでています。育てられない子供を裕福な人々の住む町に持って行って捨ててくるのはせめてもの親心だったのです。町は教会単位の教区でこの捨て児の面倒をみることを義務付られていました。教区の委員は専属の乳母を何人も契約し、彼女達に捨て子を預けるのです。費用の負担はその教区の裕福な家庭がすることになっているので、捨て児が増えるのを迷惑がり委員もその意をうけ、また乳母達もあわれみの心より教区の負担を速やかに軽くする方法を優先させことも多かつたようです。こんな状況で捨て児の救済は目に見えての重要事だったのです。

これも例のプロジェクト方式で解決を計られます。コーラム船長というロンドンと米国ボストンを股にかけて造船運輸で財を成した人が、自分に子供がなかったこともあってこの捨て児の救済計画に尽力します。コーラム71才の1739年、17年にわたる奔走が実を結び国王の特許状が出て国王貴族ジェントルマンなどからの寄附を募って捨て児育児院の設立が許可されます。二年後にいよいよ開設しました。

初日から門の前に行列ができ、2か月未満の病気でない子30人が受入れを許可され、3か月の間に120人を収容、それでも希望者は一杯で4年後には400人の本格的な育児院に拡大されます。収容された子供達は揃いのこざっぱりした制服を与えられ食事昼には肉が出され貧しい家庭以上のレベルで教育も施されるということで、その噂を聞けばなんとしてもあそこでこの子をという親は、正式の受入れを待たずに院の門前に捨てるということが増えてきます。地方からお金をとって捨てにくる運び屋まででるしまつです。育児院では捨てられて知らぬうちに凍死されるのを防ぐため門に籠を吊るし、これに入れたときベルをならせば立去ってもいいことにしたら、その日のうちに117人、その年1年間に3296人が捨てられたのでした。国王の特許があつたといっても国から資金援助ができるような仕組みは当時なく(1756年から1760年の間特例的に補助金が支給されましたが)財政をどう維持するかが院の理事達の常なる悩みでした。繰返しおこなわれた資金集めのためのチャリティコンサートは、今日のチャリティとはちがって大変切実だったのです。

1749年にヘンデルの曲をやったチャリティコンサートが育児院チャペルに1000人の聴衆を集めて大成功を収め



ます。これをきっかけに育児院からの要請をうけてヘンデルは育児院長に就任するのです。そしてそれは単なる名誉職ではなく本格的な支援に乗出します。1750年5月1日育児院で初めてのメサイア演奏会が彼自身の指揮で行われました。この時は入場希望者を収容しきれない状況で5月15日2度目のコンサートを開いています。この2回で集めた基金は969ポンドでした。当時の平均的労働者の年間収入が20～25ポンド、国王がこの育児院に寄附した額が2000ポンドですからこの額は大変なものでした。

ヘンデルの孤児院についての思入れについては、あるいは彼のイタリア旅行の見聞が関係しているかもしれません。16～7世紀イタリアは音楽作曲家と演奏家で世界を制覇していました。ヘンデルも何度もオペラ歌手をイタリアに求めに出かけました。実はその戦力供給基地として孤児院があったのです。ナポリやヴェネチアには16世紀から4つの有名なコレジオ・デ・ムジカがありそれぞれ飢えや寒さに悩む貧しい家庭の子供と孤児を収容して徹底した音楽訓練を行っていたのです。子供達は僧服を制服とし僅かの休憩食事時間を除いて夜明けから日の暮れるまで、ある子供は器楽の、ある子供はカストラート（いまはない男のソプラノ）要員として、音楽プロの養成が行われていたのです。ペルゴレージのような大作曲家も、宮廷での管弦楽団員も、そして世界に出稼ぎに出たオペラ歌手もこの卒業生から出たのです。ヘンデルがこのロンドン版をつくろうと考えたかどうかは分かりません。でも空しく凍えていく孤児も育てようでこんなにも世に貢献できるようになることについては確信があったに違いありません。

また彼にとっての特別な曲であったメサイアが、かれの晩年の新たな生き甲斐とドッキングしたことは自然なことでした。ダブリンからロンドンに戻っても、メサイアはすぐに演奏会にとりあげることもせず演奏の場所も時期も慎重に選んでいた曲です。ロンドン初演後『高貴なるエンタティメント』との誉め言葉に『わたしがただ人々を楽しませただけだとしたら残念に存じます。わたくしは皆さんをよりよくしたいとねがっておりましたので』と答えたと伝えられる思入れの曲でした。メサイアがこの子供達の役に立つならばとおもったことでしょう。以降9年間亡くなるまでヘンデルはこの育児院のためのメサイア演奏会を指揮したのです。この間の収益金6725ポンドと伝えられています。（1988. 9. 23）

（7）ヘンデル讃歌

最近の太平飽食の時代のため世から忘れられつつあるフランスの大作家ロマン・ロ

ランにヘンデル研究があります。我々の時代は彼の長編小説『ジャン・クリストフ』を青春時代のバイブルとしたものです。しかしロマン・ロランが『ベートーベンの生涯』や「ジャン・クリストフ」を書く前に、ヘンデル研究をやり、二つの作品を書いていることを当時は知りませんでした。ジャン・クリストフのモデルはヘンデルであったと著名のロラン翻訳者が指摘しているのには驚き20年ぶりに読みなおしてみました。二つのヨーロッパ大戦の狭間で反戦平和運動に徹し、汎ヨーロッパ主義を貫いたロランはヘンデルのドイツ・イタリア・イギリスと国境を越えた音楽活動に深く共感を持っていたのです。一見ベートーベンを思わせるジャン・クリストフではありませんが本質はヘンデルの音楽家像が下敷きにあつたという指摘は本当でした。

このロマン・ロランのヘンデル研究からまとめの部分を紹介します。

(1)、生涯について 民衆音楽家として

ヘンデルは1720年までにその修行時代を終えたと言われる。…その時まで彼は王侯の陰に生活しており、少数のエリートのために作曲する多くの宮廷音楽家の一人なのであった。その生活から抜けでたのはいくつかの宗教的あるいは国民的な作品を作って彼みずから民衆の声となったときであった。 1720年から死にいたる

まで彼の芸術は万人に属してしまった。彼は劇場支配人となって大衆と共に闘い、1年に2つも3つもオペラを書いて精力を消耗し、…陰謀につきまといわれ、破産に追い立てられ、不適當な土壤のなかではとうてい成長しない發育不良のイタリアオペラをロンドンで生育させようという、矛盾した仕事のために20年ものあいだ自己の天才を消費したのであった。彼はこの激しい闘争をへて、敗れながらもなお決して敗れずに、おのが道を傑作でちりばめながら、ついにおのが芸術の絶頂に、彼の名を不滅ならしめた偉大なオラトリオに到達したのであった。

彼はロンドンを去った。アイルランド総督がダブリンで音楽会を開かせようと彼を招いたのであった。彼が友人ジエネズムの詩によって『メサイア』を作曲したのは、彼自らもいっているように、『この寛大でいぎんな国民に新しい何かを提供しようとしたためであった。』ヘンデルは熱狂的に迎えられた。12月29日に彼がジエネズムに書いた手紙は喜びにおどっている。イタリアにおける若い時代の年月とともに、彼がダブリンで過ごした時期は彼の生涯でも最も幸福な時代であった。

(2)、その音楽

彼は民族的にも性格的にも深くドイツ的であったが、芸術的には『世界市民』であった。彼は当時のヨーロッパのすべての音楽の樹液を存分に吸収し、また自然の中に漂

うさらに豊かな音楽を撰取して、あたかも人が話すように書き、人が呼吸するように作曲したのであった。彼は作品の下書きのためのスケッチなどはしなかった。彼はさながら即興するように一気に作曲した。そして事実彼は古今を通じて最も優れた即興作曲家であったように思われる。それは描く音楽である。感動を、魂を、状況を、すなわち感動の額縁となっている時や場所を描く音楽である。一言でいえばそれは本質的に絵画的で劇的な芸術である。

リヒアルト・シュトラウスは、セバスチャン・バッハを源とするポリフォニックで交響曲的な流れに対して、ヘンデルを源とするホモフォニー的で劇音楽的な大きな流れを対立させている。

(3) 死後の賞賛

彼の栄光はその死後に大きくなった。…彼の生誕百年祭のためにウエストミンスターとパンテオンとで挙げられた追悼大祭は全ヨーロッパに反響を起こした。詩人たちも同様に彼を讃えた。ゲーテは彼を賛嘆していた。臨席したハイドンは泣いて言った。『彼はわれわれすべての師だ。』ハイドンはヘンデルのオラトリオを聴いて『天地創造』を作曲したのであった。ベートーベンはその作涯の終わりにヘンデルについてこういった。『これこそ本物だ』

ヘンデルのメサイアを歌うことの喜びをあらためて感じる。そして是非ともいい演奏をしなければと思う。なぜならこのロランの研究にこんな言葉が引用されてあるのです、『ヘンデルを除けば、いかなる音楽家でもその音楽家をよく理解するためには、その作品を良く演奏しなければならないなどということはない。セバスチャン・バッハは自分の家で研究することができ、しかも演奏会におけるよりも十分に鑑賞することができる。しかしヘンデルにあってはその作品の良い演奏を聴かないかぎり彼の真価を理解することはできないであろう。』(1989年1月2日)

(8) ヘンデルからモーツァルトへ

2006年はモーツァルト生誕250年でした。ヘンデルが1758年に亡くなりますが、その2年前にモーツァルトは生まれました。まるでこの二人の天才作曲家は、“生のリレー”をしていったかのようです。たしかに、この二人は本当にリレーをしたとでも言いたくなるほど、共通点があるのです。

まず二人は、人生の多くの時間を旅に割きました。そんなことは、バッハについて

いえるでしょうか？ベートーベンについてはどうでしょうか？ 否です。

ヘンデルはヨーロッパをドイツ中央のハレや、ハンブルグをスタートとして、南はナポリ、西はダブリンまでそれぞれ、重要な意味を持った旅行をしました。モーツァルトも神童として父に連れられて、ザルツブルグからウイーン、ロンドンからパリローマ、と旅をして、死の年にもプラハを訪ねていました。そしてモーツァルトは『旅をしない人は哀れな人です。』と言っています。決して旅行はやむを得ず行くのではなく、絶えず喜んでその機会をつくりだしてしていました。モーツァルトは晩年、再度ロンドンに行くことを考えていたようです。トルコ戦争で経済的に立ち行かなくなったウイーンでは、生活が成り立たなくなり、好況に沸くロンドンで仕事をしようと考えたのかもしれませんが。準備のために英語の先生についていました。晩年の三大交響曲や、あの今や人気第一のアイネ・クライネ・ナハト・ムジークはロンドンでの演奏会用に準備していたのかもしれませんが。これらの曲は何の演奏会用とも、また誰に頼まれたとも分からない不思議な名曲群なのです。しかし再度のロンドン行きは、かなわぬ夢となりました。彼の人生が短かすぎたからです。

旅が二人にもたらしたものは共通して心の世界の広がりでした。いろいろな民族や先端の思想との交わりが、彼らの豊かな思想を形作りましたし、またその音楽を全人類に向けたものにしました。それが300年を経た今も古さを感じさせないで民衆に働きかける音楽となっている理由です。

作曲のやり方にも二人に大きな共通点があります。ロマン・ロランが言うように、ヘンデルは下書きのスケッチをせず、流れるように譜面に書いたそうです。それはモーツァルトにもそのまま言われることです。音楽がすべて頭の中で出来上がっていて、後はそれを書き留めるだけで作曲ができたのです。美しいメロディがごく自然に横溢していることも共通です。不要なパッセージはほとんどなく、和声やフーガやハーモニーなどといった操作を乗り越えて、誰もが口に乘せることのできるメロディが彼らの音楽の特徴なのです。

われわれはこのひそかに行われた偉大な二人の音楽家のリレーに感謝したいと思います。

(2006年11月8日)



ヘンデルの生家 (ハレ)



ヘンデル墓碑